

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

<熊の冬籠り穴> 第49号に続く:

<入口の大きさ>

① 穴の入口の大きさは、木の張根の間を入口に利用して造られた穴では、その張根の開き具合によって決まるから大きさもいろいろである。張根を直接入口に利用していない場合の入口は普通狭く、縦・横とも30~40cmほどで、熊が這いつくばらないと出入りし得ない大きさである。

② しかし稀に、熊が容易に出入りできるほどの非常に大きな入口の穴もあって、このような穴に人が気づかずに近づいたりすると、熊が瞬時に飛び出て人が襲われたりする事がある。

<寝場所の大きさ>

① 寝場所の大きさや形もいろいろである。今まで見た穴で最大のものは底面が4m²、最小のものは70cm四方の大きさであった。底面の形も長方形・正方形・円形・扁円形などいろいろである。また底も平らなものから窪んでいるものまでこれまたいろいろである。熊が寝場所を掘り進んでいる過程で、太い張根や石や岩に突き当たると、それを避けてその上を掘り進むことがあるので、そのような穴は完成すると寝場所が段状になることがある。

② また、地面（敷藁シカラを除く）から天井までの高さもいろいろで、高い場合で1m、低いものは65cmほどである。

<天井>

どの穴も寝所の天井には、穴の上にある木の張根や、林床の細根が多数垂れ下がっていて、これが結果的に天井の土砂の崩壊を防ぐ役目をしている。要するに、熊は穴を掘る際に土砂が落下しなくなるまで土を掻き出すので、その結果として天井に張根や細根が必然的に出てくるのである。

<敷藁シカラ>

① 寝場所に敷藁が敷かれている場合もあれば、全く敷かれていないこともある。敷かれている場合でもその量はまちまちである。多い場合は寝所の全域に敷藁が厚さ20～30cmも敷かれていることがある。

② 敷藁の材料は、穴の近くにある落ち葉を集めて使うほか、付近に生えているササなどを、わざわざ咬み切って運び込んで使うことも多い。

<穴の中>

① 実際に穴の中に潜ってみると、中は土や敷藁のにおいがする以外、外界の風の音も聞こえずきわめて静穏である。しかし人が穴の近くを歩いたり付近の木を叩いたりすれば、足音や打音は穴の中にもろに響いてくる。だから人が熊穴に近づいただけで、熊はその足音を穴の中で聞きつけ、穴から飛び出してくることがある。

② 冬籠り中の熊が穴から出て山野を徘徊することがあるが、原因は銃声やチェーンソー、ブルドーザーなどの事業騒音や人の接近の気配に我慢できず、その場から逃避すべく穴から出て、安住地を求めて移動している場合である。

③ 穴の中に糞尿がある場合がある。通常は穴の端にある。

<成獣は越冬穴を複数持って居る>

① 成獣は越冬穴(冬籠り穴)を複数持って居て、同じ穴を続けて毎年使うこともあれば、複数の穴を年により使い分けることもある。従って、熊は籠っていた穴を不本意に出た場合は他所にある穴を記憶していて、そこに行き、その穴を探り出して籠る。

② 穴が造られる場所は山毎特定の地所に造られ、往古からそれは決まっている。穴同士の間隔は近い場合でも200～300mは離れている。冬籠もり穴は連続して、あるいは隔年して、熊に使われるので、

③ アイヌは毎年猟期に穴を巡検し、熊が入っていれば狩った。それ故猟師は代々その場所を財産として保持していた。

④ 同じ越冬穴と一緒に籠るのは母子だけで、それ以外の熊が複数個体、同じ穴に籠ることは絶対にない。

(丁)

